

今回筆者は、聴講者として参加したのだが良い意見交換ができたと思われる。また、この1年を通じ触覚提示技術の大幅な向上があったと感じた。

次回の World Haptics は 2007 年に日本で行われることが発表されている。また、次回の EuroHaptics については既に会場でアナウンスされており、パリにおいて6月に行われる。興味のある読者は以下の URL を参照していただきたい。

<http://lsc.univ-evry.fr/~eurohaptics/>



World Haptics 2005 デモ展示の様子

CHI 2005

竹前嘉修

NTT

2005年4月2日から7日まで ACM SIGCHI 主催の国際会議 CHI 2005(ACM Conference on Human Factors in Computing Systems) が Oregon Convention Center(Portland, Oregon USA) で開催された。CHI は HCI(Human-Computer Interaction) に関する最大規模かつ最難関の国際会議である。本会議は、招待講演(2件)、論文発表(93件、採択率約23%)、ショートトーク及びポスター(133件、採択率約30%)、ワークショップ、チュートリアル、パネル、Design Expo、SIG などにより構成された。会議への参加者は1886名(学生596人、新来者750人を含む)と昨年よりも増加した。

CHI の発表は多岐に渡り、VR、可視化、CSCW、入力インタフェース、モバイル、ロボット、ユーザビリティ、

デザイン、教育など HCI 分野の研究領域をほぼ網羅している。また、今年度の CHI のテーマが “Technology, Safety, Community” であったため、セキュリティやプライバシーに関する発表も散在した。

ベストペーパーは、(1)Tovi Grossman(Univ. of Toronto) 氏らの “The Bubble Cursor: Enhancing Target Acquisition by Dynamic Resizing of the Cursor’s Activation Area”, (2)Stuart Reeves (Univ. of Nottingham) 氏らの “Designing the Spectator Experience”, (3)James Fogarty(CMU) 氏らの “Examining Task Engagement in Sensor-Based Statistical Models of Human Interruptibility”, (4)Paul M. Aoki(PARC, USA) 氏らの “Making Space for Stories: Ambiguity in the Design of Personal Communication Systems” の4件であった。

筆者は視線や顔などの非言語情報とその工学的応用に興味を持っている。そのような発表としては、Vertegaal(Queen’s Univ.) 氏らの視線インタフェースの研究が挙げられる。例えば、多地点遠隔 TV 会議における複数のユーザの視線を計測し、より多くのユーザから注目されているユーザの人物映像を大きく表示するシステム (eyeview) が提案されていた。今年度はこのような視線インタフェースやマルチモーダルインタフェースに関する研究の発表件数も多く、活発な議論がなされていた。

筆者の発表 (“Automatic Video Editing System Using Stereo-Based Head Tracking for Multiparty Conversation”) はポスターセッションであった。掲示場所は常時用意されていたものの、発表のコアタイムが論文発表の休憩時間に設けられていたため、客足が比較的少なかったのが残念であった。

今回の CHI は 2006 年 4 月 22 日から 27 日まで、Montreal(Quebec Canada) で開催される予定である (<http://www.chi2006.org/>)。会議のテーマは “Interact, Inform, Inspire” である。



CHI2005 招待講演 (Prof.Randy,CMU) の様子